

根源におけるヒットラリズム (二)

北島平一郎

はしがり

ヒットラーの「我が闘争」第一巻を、小論の題名に副う主旨で読みかえてみると、筆者なりにいろいろ新発見がある。

一番、卑見にとって大きなと思えるものは、ヒットラーが「ドイツ労働党」に入党していた初期の、該党の政治的綱領と、この党を彼が乗取って「民族社会主義ドイツ労働党」とした後のそれとでは、政綱に天地霄壤の差があることである。前者は、左派的労働運動のそれ、後者は、右派のそれと言い得よう。従来「ドイツ労働党」の政綱については、あまり重要視されていないが、この差異には、もっと注意が払われねばならない。これについては、小論において「ドイツ労働党」の一九二一年二月二四日の政綱と「我が闘争」第一巻のそれとを比較して考えてみたい。

次に、ヒットラーの日本蔑視である。この部分は、ヒットラーの日本民族蔑視として取扱う。ヒットラーは、文化創造民族と同維持民族、同破壊民族に人類を分け、日本人は単なる文化維持民族にすぎない、と言っている。ヒットラーは、一九三六年一月、「防共協定」を日本と結ぶが、一九三九年八月、「独ソ不可侵条約」を締結して日本を虚

説論

仮にする。しかし一九四一年に入ると、英国、そして米国との戦争を盛んに日本に慫慂する。松岡洋右外相、東郷茂徳外相、大島浩駐独大使等にこれらを迫るのである。一九四一年一二月、日米交渉たけなわの四〇五日には、日本の対米戦争にドイツが参加し、相互に単独講和しないという条約草案をさへ大島大使に手交するのである。(一二月一日条約化)そして一二月八日の後、ヒットラーは同一一日、対米宣戦に踏切る。

これは一見、日本の価値を見直して共同戦線をはるように見えるが、実情はさにあらず、同年六月からの対ソ侵入に失敗しそうになり、日本を利用して、何処かに活路を見出そうとするヒットラーの絶望的な苦しまぎれの手段であったとみななければならない。ヒットラーは、「我が闘争」に優秀民族といえども従者がなければ、活動できないと書いている。日本蔑視論と優秀民族論と従者論からすると、ドイツ民族が、十分活躍するために、日本を従者として利用するという論理が、この日独両国の対米宣戦についてその経緯上、ピッタリあてはまる如くである。ヒットラーは、日本を見直したのではなく、開戦以来二年間、タブーとしてきた対米戦争に、ドイツの劣勢とともにそれが不可避とみて、それに踏み込むよすがとして日本を利用したとみるのが、この件については至当の解釈となる、と考えなければならぬ。

日本蔑視論は、拙稿(一)にあげた「我が闘争」の和訳書にはすべて削除されていた。当時としては当然の措置であったろうが、今日よりみれば、何となくうしろをふりかえりたくなるようなそれである。

目次

一 ヒットラー思想の実像

ヒットラー関係文献

ヒットラーと世界的思想家

ヒットラー思想の短絡性

世界大戦敗戦の復讐

兵士政治家としてのヒットラー

二 「我が闘争」第一巻「二つの審判」

① 民族と種族

ウィーンと独逸合邦

反議会主義

汎ゲルマン主義 (der alldeutschen Richtung)

人口問題と生活圏 (以上前号)

国家、種 (der Art)、経済、マルキシズム (以下本号)

世界戦争 (Der Weltkrieg)

戦争宣伝 (Kriegspropaganda)

革命

ドイツ労働党 (Die Deutsche Arbeiterpartei)

崩壊の原因 (Ursachen des Zusammenbruches)

ジャーナリズム、芸術

君主と革命家

アリア民族、ゲルマン種族

ヒットラーの日本民族蔑視

犠牲

シュウリイ

② ドイツの敗亡と再生

一九一八年の敗北

大衆の動員

兵營と政治結社

③ 闘争へのステップ

国家、種 (der Art)、経済、マルキシズム

経済が繁榮して国家が栄えるという理論は、事物の本末を転倒している。国家が安定、確立してこそはじめて経済が安固となり、その活動が妨害されずに行われるのである。国家の發展なくして何の経済ぞ。マルキシズムは、国家にとって最大の災厄である。ビスマルクの社会主義立法を研究したが、⁽¹³⁾マルキシズムとジュウリイの関係は、更に究明しなければならぬ。一九二三年—二四年においてドイツの将来の問題は、マルキシズム覆滅のそれであった。ジュウリイは、モーゼの宗教で身をつつみ、他民族を己の民族のために働かそうとしている。

国家の目的は、種の保存にある。そして種は、天の配剤である目的達成に邁進する。国家は理想のために闘う。人は理念のためには死ぬことができるが、経済のためには死ねない。英国は自らの自由のためのみでなく、群小国家の自由のために闘ったのである。そしてプロシアは、死を恐れぬヒロイズムによってドイツ帝国を形づくった。それは決して金融活動や、商業取引の盛行によってそうなのである。国家は、平和的経済活動によっては、決してその基盤をつくらぬ。それは常に、そして専ら、種の保存という本能によって基礎づけられるのである。ヒットラーの言説は、神秘論、運命論につらぬかれている。天の配剤における要素を発見し、これに国家活動をあわすことが、

ドイツ民族の明日の飛躍、發展を約束するという言い方である。国家の目的は經濟になく、種の保存にあるというのも、この範疇に属する一つであらう。

世界戦争 (Der Weltkrieg)

ポーア戦争には、英雄的闘争に喝采を送り、日露戦争のロシア敗辱の中に、オーストリア・スラブ世界の敗北をみたヒットラーは、バルカン戦争が世界に破局を強ひ、フェルジナンド (Franz Ferdinand) 大公暗殺の報に、彼は、犯人をドイツ人だと思ふ。それこそは、大公の奥匈国スラブ化運動への鉄槌である、と。犯人がスラブ一族のセルビア人と判明した時、彼は運命の皮肉を戦慄とともに感じる。スラブ最大の友人が、スラブの手によって命を断たれたのであるから。

奥匈国は、フランツ・ヨーゼフ (Franz Josephs) 王とともにあつた。彼の死は、帝国の死である。大戦は、避けられなかつたか。少なくとも一、二年の延期は可能であつた。しかし最も不適當な時に物事が突発するのが、常に独逸両国外交の呪われた運命であつた。社会民主党は、対露戦争扇動を行い、中央党は、オーストリアをドイツ外交のかなめに据えていた。ドイツは、平和保持のための同盟に巻き込まれて、戦争派にくつがえされるという世界同盟の犠牲者となつたのだ。そして大衆は、最後通牒 (Ultimatum) のトーンを決して苛酷なものとは思つていなかったのだ。一九一四年の闘争は、言われる如く、決して大衆に押しつけられたものではない。それは、全民衆によって欲しられたものだったのである。

この大戦にヒットラーは、ババリア連隊 (ein bayerisches Regiment) に志願して入隊を許されたとし、彼はオーストリアのためにではなく、ドイツのために命をささげる決心だとした。彼は書いた。「私はラインをみた。我々

の列車が、ドイツの流れの中の流れであるそれを古き敵の貪欲から守るために、この静かな水にそって西進している時。早朝の霧のベールを通して最初の陽光が、ニーデルバルト記念像 (Niederwalddenkmal) の姿を我々に浮かび上がらせたその瞬間、この果てしなき輸送列車の窓から『ラインを守れ』(die Wacht am Rhein) の歌声が、期せずして朝空の中へまき起った。私の胸は、はりさけんばかりになった。」と。⁽¹⁴⁾ ヒットラーの親独精神と第一次世界大戦敗戦への思い入れをみるべきである。

マルキシズムは、六〇年の努力にかかわらず、大戦勃発とともにその不戦の主張は空に帰し、人々は銃をとって立ち上がった。マルキシズムには、力のみで対抗しても無益である。哲学には、哲学をもって争わねばならぬ。その上で、力をもって支持しなければならぬ。ビスマルクの社会主義立法は、この意味で失敗した。彼の依頼したものは、マルキシズム思考の生み出した機関であったから。つまり、羊の世話を狼に頼ったのである。大衆を無視してはならない。大衆の感情は、しばしば理性よりも適確に事物を判断、決定する。そして多数の労働者を組織するのに指導者なしで成功するなど、聞いたことはない。平和主義的民主主義 (Pazifistische Demokratie) は、ブルジョア社会の一にも二にもジュウリイにかきまわされた幻想の産物に過ぎない。

戦争宣伝 (Kriegspropaganda)

宣伝の重要さは、ヒットラーイズムの一つの柱であるが、これについて、宣伝は人工的なものとヒットラーは主張する。このことは、アーリア人種を運命的優秀民族と規定するのと対比的である。宣伝の対象は、大衆であり、その要素は人道主義、自由である。そしてその属性は美学である。訴えるべきは大衆の情緒であり、知性ではない。それは低く基底し、限られたものとなる。宣伝の方法は、ある一点の繰り返しであり、あれもこれはいけない。宣伝は、

科学的指導 (Wissenschaftliche Belehrung) であつてはならない。大戦における敵の宣伝は、これらの点で、独逸兩國のそれにはるかにまさつていた。独逸の新聞がやったように、敵兵を漫画にするのは、敵の獐狂さについて我兵をあざむき、我兵の士気を低下させる。敵が、ドイツ人を野蛮人、フン族と宣伝したことは、正しかった。⁽¹⁵⁾ 英国宣伝は、明確で中途半端なことではなく、大衆の理性よりも感情に訴えた点、賢明であつた。戦犯問題について、ドイツひとり破局の責任を免れさせられるという立場でこれを論じてはならない。たとへ事実と照応しなくとも、一切の非難を敵に負わせることが正しい。大衆は流動的で、新を好み、奇をてらう。宣伝は、これに応えねばならぬ。ドイツは、宣伝戦で敵に完敗した。戦後ドイツ革命のスローガンは、何と、敵が四年半、ドイツ向けに流しつづけたそれであつたのだ。ヒットラーの宣伝についての考え方は、徹底しているが、それも戦争についてのそれである。つまり、再戦にそなえての示唆となつてゐる。

革命

一九一五年、一六年、独軍の士気は、銃前、銃後ともに完全に低下してゐた。敵の宣伝戦は、完璧であつた。ドイツに勝利はない。戦争は、果てしなく続く。戦争を終らせないもの、それは独逸戦争屋とカイザーである。彼等をさえ排除すれば、世界の民主主義国は、ドイツを世界永久平和連盟に暖かく迎え入れるだろう。戦争党は、プロシヤであり、その跋扈の下にババリアは、呻吟している。かくヒットラーは、敵宣伝を描写し、また銃後からの手紙が、敵宣伝におどらされ、独兵の何十万人の死をもたらしたと切齒する。一九一六年九月、ヒットラーは負傷し、ビーリッツ (Beelitz) の病院に送られるが、そこで負傷兵が自らを傷つけ後方移送をかちとつた勇氣を語り、それがそこで、正直で勇敢な兵士の死よりもよりたたえられてゐるのを見て愕然とする。事情は、ベルリンでも、ミュンヘンでも

同様であった。そして彼は、一九一六年—一七年を通じ、経済が中央集権化され、全生産がジュウリイの財政指揮の下に運営されているのをみて、勃然たる怒りをあらわす。

一方、東部戦線では、独兵は遅鈍な攻撃を繰り返し、ロシアは、倒れても倒れても新手を繰り返す。連合国は、これをあざ笑っていた。しかし、一九一七年の二つの出来事、ロシア革命と伊軍カポレットの敗戦が、ドイツ前線に活を入れた。連合国側の敗辱は、既定の事実となった。「南チロル山の影が幻想を重苦しくしめつけ、カドルナ將軍の敗兵 (die geschlagenen heere Cadornas) は、フランダースの霧の中まで陰うつな顔を浮かび上がらず。勝利の確信は、敗北の恐怖にかわった」とヒットラーは書く⁽¹⁶⁾。しかしこの瞬間、ドイツ国内で弾丸ゼネストが勃発する。前線の独兵は、死を賭して戦い、銃後は、それをくつがえそうとする。この結果、独軍の西部大攻勢は挫折し、ドイツは、再び勝利なき戦いにのめりこむ。

ヒットラーにとって独敗戦は、革命から結果した。彼は、一九一八年一〇月一三日のイーブルにおける戦いで、英軍毒ガス攻撃に両眼を犯され、このため、再び入院する (ポメラニアのパセウオーク病院 Lazarett Pasewalk in Pommern)。一月に入り、病院へ独水兵の一隊が乱入し、革命を宣言した。革命は、ヒットラーの予想を裏切り、急速に国内に伝播し、ついにそれは、独帝の退位へと発展する (一一月九日)。ドイツの崩壊。そしてそれは、まさにこの革命以外の原因ではなかった。ヒットラーは、昨日までの敵であった者の慈悲にすぎた平和には、耐え得ないとし、また新政権の総選挙と秘密投票を受入れ難いとして、政界への進出を決心する。ヒットラーは、書く。「幾十万の戦死者の墓をあばき、彼等の犠牲を嘲笑した故郷へ、彼等を復讐の鬼としてかえらしめよ。太陽の暑熱、身をさす吹雪、餓え、渇き、眠りなき夜、果てしなき行軍に耐えた兵士の困苦は何のためであったのか」と⁽¹⁷⁾。この最後の

部分は、やはりまがうかたなき一篇の戦争詩である。しかしこれとてドーデーの短篇(前号五四頁)に如かざること、天地の差をもつて比すべきであらう。

ドイツ労働党 (Die Deutsche Arbeiterpartei)

ヒットラーが、第一次世界大戦後、旧連隊に戻り、復員業務に従事した後、ドイツ労働党に入党してその党首となつてゆく過程は、今日周知の事実となっている。

ヒットラーの経済観は、資本は労働の結果であり (das Kapital in jedem Falle nur das Ergebnis der Arbeit)、国家あつての資本活動であるという観念においては、一貫している。彼は、資本は、民族のメイドであり、決して主人ではない、とさえ断言している。国家の資本に対する態度は、一に豊かで、民族的独立の経済を保持し、他方、労働者の社会的権利を保証するものでなければならぬ。⁽¹⁸⁾フェーダー(Gottfried Feder)の経済理論こそ、経済的独立と自由を達成するための闘うドイツのそれである。①生産的労働の終局の結果としての純粹資本 (reinen Kapitals) と、その存在と本質が投機にのみ存する資本とは、区別されねばならない。②株式取引所と、金融資本の投機性を支配するのは、利子である。③利子奴隷の撲滅。株式取引所資本を、国家経済から分離する。④金融資本に対する闘争を通じて、独立民族維持の基礎を破壊することなく、ドイツ経済のアウトタルキーをつらぬき、ドイツ経済の国際化に反対する。これは敵対民族に対し戦いを挑むのではなく、国際資本に対してそうするのである。⑤国際財政、金融資本に対する闘い (Der Kampf gegen das internationale Finanz) は、ドイツの経済的独立と自由のための闘争プログラムにおいて最も重要である。⁽¹⁹⁾

ドイツ民族の闘争の綱領は、次の如くである。

我々の闘いは、我が種族と人民の存在と再生産、子供達と我が純血、祖国の自由と独立等を確保するためであり、我々は、創造主から与えられたこの聖なる使命を全うするため、生成発達しなければならない。ヒットラーの経済原論は、資本、労働、生産、アウトアルキーを軸とし、投機、株式、利子、金融とそれに国際経済関係の一切を捨象するもので、これは明らかに、言うまでもなく、戦時経済論の展開であった。

崩壊の原因 (Ursachen des Zusammenbruches)

ビスマルク帝国の建設は、議会主義のトリックの中から生れ出たものではない。それは、パリを取巻く雷鳴と、砲声の中から生れ出たのである。崩壊の原因は、事物が以前占めていた地位とその現在の立場との比較からなされねばならない。ドイツには現在、品物は豊富である。しかし名誉と栄光は、地に堕ちた。金を貯め、これを費消するため、国家を利用する者共には、これは理解できない。大衆も、インテリさえも、崩壊の原因を経済的なものに求めている。しかし崩壊の第一の原因を構成したものは、政治、倫理、道徳、そして文化 (Politischer, kultureller, sittlich-moralischer) といった諸要素である。⁽²⁰⁾

ドイツ今日の悲惨は、敗戦の結果だという人々がいる。しかしそれは、誤りである。これらの人々は、ドイツの敗北は、軍国主義を払拭し、ドイツに真の再生をもたらすのだ。この血の闘争の唯一の責任者は、ドイツだといっていたのではないのか。敗戦は、もとより深刻である。敗戦の原因を、しかしながら、造成したものが問題である。

①彼等は、ドイツ敗北をルーデンドルフ (Rudendorff) 以下の指揮官の責に帰す。しかし独軍は数、兵器においてまさり、士気もまた旺盛な敵と四年間、わたり合い、数々の勝利を収めたのであり、その功は独軍指導者にこそあるのだ。②敗戦の責は、国内の腐敗、卑怯、人格の喪失、にある。③これを醸成する準備をしたのはジュウリイであり、

マルキシストの活動である。そしてなおドイツ人は、敗戦を戦争の終結として狂喜して迎えたのである。かくの如く、第一次世界大戦敗戦の責を、これでもか、これでもか、とドイツ人に負わす言い方が、ここにあり、それはまたドイツ再戦の義務感に人々を感奮興起させる。

ドイツの経済的繁栄の裏で、不満は爆発点に達していた。経済の盛行は、金崇拜 (Weichrauch dem Götzen Mannon) を生んでいる。ジュウリイの銀行、金融支配が実体である。ビスマルクもカイザー陛下も、これに誤られていた。経済の全体が、株式取引所に握られてきた。労働さえもが、不謹慎なジュウリイ・ビジネスマンの投機の対象である。ドイツ経済の国際化は、株式取引を通じて進行し、ついに独全鉄道が国際金融資本に売り渡されてしまった。⁽²¹⁾ これらは、今や積年の宿弊となっている。これを癒すものは、ただ崇高なる英雄的態度を除いて何もない。

教育が、また墮落している。それは能力の開発を怠り、知識偏重におちいった。すなわち「歩く百科辞典」を創出し、強い人格の創造に吝となつてゐる。最も決断を必要とする時、君主が近づかれ得るその時に、彼のまわりには、優柔不断なサナダ虫のようなおべっか使いが集まつた。君主の意を迎えることばかりが建議され、決定された。側近は、このような場合破局を避け、君主制を守るために君主の愚を正さなければならなかつたのである。君主は、智識と理性と人格の最高値である。しかしフレデリック大王 (Friedrich dem Großen) やウィルヘルム一世 (Wilhelm I) だけがそれに値するのだろうか。⁽²²⁾

こういうおべっか、優柔不断は、教育の欠陥である。今日、人々は、己れが一九一九年、最も卑劣な態度で見捨てた国王にまたエールを送りはじめた。しかしそれは、無駄で且つ無用なことである。しばしば指摘されることだが、ここにもまた国際金融資本に対するヒットラーの冗長な攻撃の繰り返しがある。

新聞のもつ、またそれが振う効用と影響力についてヒットラーは、恐ろしいほどの洞察力をもっている。宣伝と大衆組織に対する彼の勤が、ナチズムを創出したといつて過言ではないほどである。戦時中の平和主義宣伝、西欧デモクラシー、議会主義、そして国際連盟、これらがドイツ国民の愛国心を破壊し、民族性を麻痺させたことは想像を絶する、とヒットラーは主張する。マルキシスト新聞の絶えざる政府攻撃が、政府を恐れさせ、その卑屈に輪をかけた。そしてこれを指導し、あやつったものは、ジュウリイである。フランクフルタ・ツァイトング (Frankfurter Zeitung)、ベルリーナ・ターゲブラット (Berliner Tageblatt) は、その公的信用性をジュウリイに利用されたのである。宣伝は、天国をも地獄と化し、悲惨な生活もバラダイスと化せしめる等と、ヒットラーは強調し、この観点から彼は政権への接近、その確立のため、種々の宣伝の利用に全力を投入したのであった。

ジャーナリズム批判に関し、彼はその読者の三類型という分析を行っている。第一は、最も単純で他人の思考に容易に従う型、第二は、何かの失望から何物も信じない、すべて虚偽だと思ひ込んでいるタイプ。第三は、最も少数派に属し、新聞を無批判に受入れず、自己独自の判断をそれから導こうとするタイプ。今日、数のみがものをいう世界で、⁽³³⁾最多数派の第一のグループが、ジャーナリズムに支配され、ひいては彼等が与論を形成し、世の中を指導するのである。ヒットラーは、こう言い、ここに宣伝のカラクリをみている。

アーリア民族保持、血の純潔を唱道するヒットラーにとっては、これらを媒介する結婚が社会的国家的最重要行事の一つでなければならぬ。ジュウリイ的、政治的、倫理的、道德的退廃、独旧貴族の墮落が、健全な結婚を破滅させた。現実にはドイツ国民の性的墮落、性病の蔓延。これらに対し、ドイツ為政者は、何らの手段をとらなかつた。

結婚は、健全な子孫を得るため、種の純粋な保存のため、青年期のそれが望ましい。結婚は、国家的事業と考へ、住宅問題、収入問題が解決されねばならない。⁽²⁴⁾これを放置して性退廃にふけるならば、ソドムとゴモラ(Sodom, Gomorrah)の運命が、明日のドイツをみまい、それは未来永劫、地獄の業火に焼かれることとなるであらう。ヒットラーはこう言い、また性病撲滅のため強力な運動が展開され、あらゆる退廃が劇場、文学、美術、キネマ、新聞、ポスタ、陳列窓から追放されねばならないと叫ぶ。

現代の狂気は、ボルシェビキ芸術が最も端的に表現している。キュービズム(cubism)、ダダイズム(dadaism)の世紀末美術が氾濫している。ゲーテ(Goethe)、シラー(Schiller)、シェクスピア(Shakespeare)等が現代から嘲けられている。しかしそれは、嘲ける奴等の無力を隠すためにしか過ぎない。サンサーシ宮(Sansouci)の英雄フリードリッヒ(Friedrich dem Grossen)は、カフェ屋のフリードリッヒ(Friedrich Ebert)とは、比喩ものにならない。彼等は、太陽と月の違いである。この状態では、革命が必要である。しかし革命は「全構成物をずたずたにしてしまつてはならない」とヒットラーは言う。「革命の目的は、悪しきもの不適当なものをとり払い、むき出しになった土台の上に、新しく建設し続けることである」と。⁽²⁵⁾ここに、彼の革命観の一端をうかがい知ることができる。いずれにしろボルシェビズムは、現代の美術感覚を麻痺させる。ペリクレス(Pericles)の時代が、パルテノン神殿に体现されているように、ボルシェビズムの現代は、キュービストの嗜虐性に体现されているのである。

古代の都市は、芸術と美術の粹であつた。カセドラル、パンテオン、アコロポリスが、屋並みの低い街の上にそびえたつていた。現在は住民が諸所に混住し、全体のための風格ある都市づくりは、地を払つてしまった。美は、中世の遺物のみである。後代、人はジュウリーの建てた百貨店をどうたたえるのか。国会の壁が漆喰塗りになつた。しか

しそれこそは、プラスチック議員諸公には、お似合いの構図だ。

宗教は、宗教人の墮落のため、この倫理道德の退廃現象と人心の極端な動揺期に一層悪化した。最悪の事態は、キリスト教と政党が抱合し、宗教が政治のため如何なる手段にも利用されることである。これは戦前にはじまり、ここからカソリック信仰と政党とを同一視しようとする試みが、恥じもなく行われたのであった。

あらゆる不決断が、ドイツのすべてを渋滞させた。国会も、そして軍事さえも。ビスマルクの「可能性の技術」というのは、決して柔軟ということではなく、すべてのことにあらゆる可能性を追求せよということである。政府は、スチュアート・チェムバレン (Houston Stewart Chamberlain) の思想を素通りした。アルザス・ローレン問題にしても、フランスをやっつけもせず、アルザス人に権利も与えず、裏切り者のウエッテレ (Herr Wetterle) に名をなさしめている。ジュウリイとマルクス主義者は、今日、新聞でドイツの軍国主義化を宣伝し、ドイツ人はこれを恐れて軍事訓練を放擲しようとしている。来るべき戦争にドイツ軍は、不十分な装備と未熟な兵士とで戦わねばならぬだろう。²⁶この項における結婚は、ヒットラーによれば、種の保存のための厳粛な行為以外のものでなくなる。強健な子孫を得るためのみのものであり、愛とか、両性の合意とかは問題外である。エバ・ブラウン (Eva Braun) という愛人を一七年間持ちながら (死の間際に結婚)、生涯不犯を装っていたヒットラーの秘密は、案外こんなところにあるのかもしれない。

君主と革命家

ドイツ革命の価値を革命家のたけと価値で測ろうという人は、後世の人々の判断の前に恥をかいて頭をかくさねばならない。君主は、一方、直截に発言する人を嫌い、彼のまわりにはおべっか使いばかりが集まる。君主を、従って、

教育するものは、こういうおべっか使いのみとなる。今日一国の王女様が通りを行列で美々しく歩こうと、人民の台所で御試食遊ばされようと何事でもない。昔とは、大違いである。また君主の節儉や勤勉の物語は、今日、人々への感興も起さない。人々は君主に向い、眠る時間を惜しめとは、決して言わない。ただ王家と民族に、名譽な統治者としての義務をつくすことで満足するのみである。しかし言うならば、君主制の方が、その国家的安定、責任の明確化、健全な行政、国家的芸術性において野次馬的議會よりは余程すぐれている。⁽²⁷⁾

第一次世界大戦の敗戦を侮やみ、ドイツを強力な復讐民族に仕立て上げようというヒットラーにとって軍隊は、党とならぶ国家機構の二本柱の一つである。民族が、ジュウリイの陰謀によってバラバラにされようとしている時、およそ責任という概念が麻痺している現在、ベルサイユの精神、株式操作、数の上に代表される偶発的な議會の支配、卑怯、自己主義の蔓延、誤れる国際主義にもとづく黒人、中国人、フランス人、ドイツ人等の融合といった概念に立ち向かうものこそ、ドイツの軍隊でなければならない。⁽²⁸⁾ ヒットラーにとって軍隊こそは、犠牲精神、一般福祉への個々の奉仕、決断、祖国への忠誠、理想主義、ジュウリイの多数信奉に対決する能力と効率の発現等を体现する存在であった。ヒットラーは、一九二三年の「ミュンヘン一揆 (München Putsch)」の失敗から、軍隊に対する観念を右にのべたように基本的に固定したのである。なお、彼が軍隊から政党活動に入った経緯は、ここに繰り返すまでもない。なお、さらに、ヒットラーは、軍隊はドイツ民族の最高の学校であり、若者は、二年の徴兵で鋼のように強健に鍛えられ、またそれはドイツの自由と子孫の保持に奉仕する最強の武器である、⁽²⁹⁾ と言い、なお次の如く主張する。

政府と官吏は、自己否定、正義の統治と行政、法と一般倫理観念の一致という原則を遵守することから信頼の存在となる。しかし、旧ドイツ帝国の崩壊の真の原因は、どこにもみられるこれらの欠如の問題ではなく、国民の歴史的

發展のために民族問題が如何に重要かを認識しなかつたことにある。⁽²⁹⁾すなわちそれは、種の保存と種族の増殖、自然法への依拠を尊重するや否やのプロセスの問題であつた、と。スターリンは、ソビエト国軍の共産党化を、トロツキ I (Lev Trotsky) 革命軍事会議総長 (President of the Revolutionary War Council) の疎外 (一九二五年一月)、国軍掌握のための葛藤、肅清に次ぐ肅清を通じて最大困難の下に達成する。ヒットラーは兵士政治家として、S・A、S・Sの手兵を擁しながらも軍に依拠し、それとの抱合に、何らの疑いを入れない。一九二三年一月、ミューンヘン一揆の軍による弾圧も意に介さない。プロシアの栄光と伝統を信仰とし、軍への自然の尊敬 (伍長勤務上等兵としての) を軸として、ドイツ国防軍を第二次世界大戦遂行の中核として育成してゆく。

アーリア民族、ゲルマン種族

強きものが支配する。これが、動かすべからざる自然の法則である。強弱両様の種が雑婚すると、強きものよりは弱く、弱きものよりは強き中間体が生れる。これは、すべてのものより高き生成を目指す自然の意思に反している。鷲鳥に対しヒューマニスト的な狐、鼠に友情をもつ猫などはいない。アーリア民族の劣種との数万年にわたる雑婚は、文化的人民の終焉となつた。アメリカ大陸における純血のゲルマン住人は、その理由によつて、該大陸の主人公となつた。また闘争こそが、種の健全と抵抗の力をつけ、より高き發展への原因となる。

弱きものは、数の多さで最上のものをおおいつくしてしまう。しかし自然は、健康と強さの点で弱者に生存のきびしい制限を課する。平和主義者、すなわちジュウリイに犯された人々が多数であるドイツ人は、平和主義の勝利のためには、あらゆる手段を用いて、彼等が忌避しているその戦争を戦わねばならぬ。ウィルソンの唱導し、ドイツの夢想家が追隨したのは、まさにこれであつた。平和主義は、唯一無二の支配者が世界を治めている時成就する。しかし

そんなことは、ありもしない。まず戦い、そして考える。これを怠ると地球が、何百万年無明の闇に漂っていた世界が、再現する。

科学、技術、芸術、発明は、一種族の創造的生産物である。創造的種族が、血の純潔を失って亡びると、過去の偉大な文化は死滅する。生きんと欲する者は、戦わねばならぬ。この自然の法則を嘲笑う者への答は、苦悩と不幸、疾病といった災厄である。創造的種族とは、アーリア民族である。人類は、三つのグループに分けられる。文化の創造者、文化の維持者、そしてその破壊者。アーリア民族こそは、その第一のものである。アーリア人は、人類のプロメテウス (Prometheus) である。その輝ける額から常に神授の天才の光がほとばしっている。他の人種は、文化におけるその外側の紛飾者に過ぎない。例えば日本はこれにつき、その文化に欧州の技術を付加したと言う。しかしそれは違う。欧州の文化が、日本の特色でその外面を飾られただけである。日本文化は、七〇年前、アーリア文化によって目覚めさせられた。この刺激を失えば、日本文化は、その特色だけを残して、その現在の文化は動脈硬化を起し、石となってしまふだろう。かかる外国文化を吸収し、それに適応して後その影響をたたれて硬直化する人種は、文化維持民族であるに過ぎない。創造的種族が、文化を創り出し、これが長い年月、文化維持民族の中に拡散しやがて硬直し、消えてゆく。歴史はこの繰り返しである。³⁰⁾

世界は、個人的にも種族的にも創造するものが、支配しなければならぬ。個人の場合、それは天才である。天才は、発明、発見、建築、絵画という外観でのみ理解される。世界は、これらの知識を得るために長い時間を必要とする。創造民族であるアーリア人は、運命の導くところに従う。文化に必要な要件は、土壤、天候、臣従者である。特に、最後のものが最重要である。臣従者なければ、如何にアーリア民族といえども発展を遂げられない。人は馬を何千年

説 使用し、それが、自動車に発達し、馬を無用とした。低俗な民族は、高等民族に奉仕して、世界は発展する。アーリア民族は、この法則に従って低俗民族を支配し、これを導いた。アーリア民族が、その独自性を失うのは、この低俗民族との混血の結果となる。

ヒットラーの日本民族蔑視

ヒットラーは、ここで突如日本に言及する。「我が闘争」第一巻に日本が出現することは、興味深い。ただそれは、日本を彼がいう文化創造民族ではなく、その維持民族に過ぎないのだというところにある。日本民族をけなしめていることには変りはないが、ここでヒットラーが、日本を登場させた真意は、彼のロシア観に深い関係を有する。ヒットラーの日本理解と評価は、このように日本人を民族として見下したものであった。しかしわざわざ日本をあげて、名指しでとにもかくにも論評を加えていることは、一九〇四年—五年の日本の対ロシア戦争におけるその勝利に、彼が一種の感懐をもっていたことにもとづくと考えられる。しかしそれについてもヒットラーは、一言を有し、「我が闘争」(Mein Kampf, A. Hitler, a.a.O., S. 154f.) にあつて、一九〇四年の日露戦争が独露戦争であったなら、一九一四年の世界戦争は起らなかつたであらう、と甚だ示唆的な、例によりヒットラー一流のハツとするような言説をなしている。これから察するところは、ここでヒットラーは、事物の徹底化ということを強くのべ、また対ロシア前進が、ドイツに領土と食糧をもたらすとのべていること。そしてそのためには、英国との同盟が必要とのべていることなどから、当該独露戦争には、独英同盟のうへ、ロシアを地図上から抹殺するぐらいの大打撃をこれに与えるのであったのに、と言明している如く読みとれる。ヒットラーが、この時、日英同盟(the Anglo-Japanese Alliance, 30 Jan. 1902)、英独揚子江協定(the Anglo-German Yangtze Agreement, 16 Oct. 1900)等を頭にもつて発言

していかどうかは、不分明である。そのうえ、ドイツには、ビスマルクの三帝連盟条約 (der Dreikaiserbund von 1881) ならびに再保障条約 (der Rückversicherunger Vertrag, 18 Juni 1887) 、「またフォン・ゼークト (General Hans von Seeckt) 、「フォン・B・ランツォウ (U. von Brockdorff-Rantzau) 派のラッパロ条約 (Rapallo Vertrag, 16 April 1922) 等の根強い親露伝統もあって、独露同盟論は、まだまだ当時、大きな論議の対象であった。その点からもこのヒットラーの発言は、甚だ問題性である。しかし考えようによってはそうだからこそ、「我が闘争」第一巻の書かれ出版された一九二五年七月一九日という時点で、対露進撃論を展開するところに、鬼面人を驚かすヒットラーの真骨長があったのだということであるのかもしれない。⁽³¹⁾

しかし日本については、ここから言えることは、ヒットラーは、日本の力と政策をけなしめ、これに隔靴搔痒の感をのべて、日露戦争の結果にかかわらず日本をたく買っていないということである。

「我が闘争」のこれら日本語訳には、少なくとも拙稿の一 (一九八九年一〇月、法学論集第二〇号) にあげた和訳書には、すべてこれら日本に関する本文の箇所は、削除されている。興味のあるところである。昭和十五年 (一九四〇年) 六月には、「我が闘争」の抄和訳が出ているので、相当早くから、「我が闘争」を簡約、一冊ものとした紹介もなされていたのであるが、今日の眼からみると、日本に関して最も重大な要件は、日本国民の眼から一般的にかくされていたということになる。当時、原書の輸入とその一般的販売については、遺憾ながら、筆者において詳らかにしない。他日を期さなければならぬ。これにつき、御高教をいただけるむきがあれば、筆者望外の幸せであります。

しかし当時、筆者は生徒であったけれど、世間で、ヒットラーは、日本人を黄色人種だからといって見下しているという噂の根強いものがあつたことを記憶している。ただし証明は、勿論できない。だが、おそまきながらこの噂とヒ

説
 ットラーの日本人観のフリーズとを重ね合わせると、火のないところには煙はたたないという俗諺が、生きてくるように思える。

論
 その後、日本は、ヒットラーと一九三六年一月二五日、日独防共協定 (the Anti-Comintern Pact) を締結し、翌年一月六日、イタリアをもこれに引入れる。ここまでは、三国対等互恵に同盟の話し合いをしていると考えられ、ドイツにおける、日本の評価も上がったと思えるが、その後は、そうではない。すなわち一九三八年になると、ヒットラーは、チェッコスロバキア、ポーランドに防共協定への参加を慫慂し出す。この時は、日本にこの話を通じたという形跡はない如くである。日本の評価は、一度に逆戻りした感じである。ポーランド、チェッコスロバキアともに、最後これを蹴る。両国は、一九三四年の東方協定 (the Eastern Pact) 協議にも結局、背を向けた経緯がある。そこでヒットラーは、ドイツ国益の最後の手段として、彼の誘いの手を、ソ連に向ける。すなわち、防共協定の敵対者に手を差し出すのである。そしてドイツ側は、防共協定は、決してソ連に向けられた敵対的協定ではない、と臆面もなくスターリンに言明する。東洋の君子国日本にとっては、一寸考えられない裏切りの事態となるのである。平沼騏一郎首相ならずとも、全く「複雑怪奇」と言わざるを得ないような局面となったのである。この対ソドイツ外交が、日本に通じられていないことは、言うまでもない。これが伏線となつて、一九三九年八月二三日の独ソ不可侵協定 (Le Pacte de non-agression germano-soviétique) の締結となる。この間の経緯は、今日周知の事実であるが、この事情は、A・バロック、「ヒットラー、暴虐の構想」、W・L・シャイラー、「第三帝国の興亡、ナチ・ドイツの歴史」、J・C・フェスト、「ヒットラー」等に詳し⁽³²⁾。

このヒットラー外交による日本無視が、非常なものであったことは、何人も否定できないであらう。またその直接

の結果として、平沼内閣の瓦解(一九三九年八月三〇日)を引き起している。この事情で日本は、これに充分憤激してよいにもかかわらず、そうはせず、それは一九四〇年九月二七日、日独伊三国同盟の結成を強行するのである。騎虎の勢いかもしいれないが、そういうのが如何に恐ろしいかということである。これは、大変な無理算段であったことは、この事情から当然推測できるところである。後の進展からみて、何事も無謀はよくない、という好例であろう。この時かえってソビエト側は、時の外相モロトフ (Vyacheslav Molotov) が、ドイツの対ソ接近をみて、日本の立場を心配している。いやしてくれている、といった方がよいのかもしれない。すなわち彼は、ドイツの外交官が、クレムリンによって英仏両国に圧力をかけるためにドイツが利用されてはならない、としていることを困った者達だと言いながら、日本が、ソ連はその西国境上 (ses frontières occidentales) の圧迫から開放されて極東に力を伸ばすことができると感じることを恐れ、「ドイツとソ連の間の一寸した調整にも神経をとがらすだろう」と言っている。防共協定の対象国から同情されていれば、言うことはない。⁽³³⁾ 同様に、仏外相であったボネ (Georges Bonnet) は、「独ソ協定によってソ連は、戦争の場合に、その闘争の圏外にたち、力を充分に保有して、欧州、アジア、そして多分全世界に共産主義の勝利 (le triomphe du communisme) をもたらすだろう」と彼の懸念を表明している。⁽³⁴⁾

日本国内にも、当然懸念をこのことにつき表明する人は、多数いたはずであるが、時の流れが、良識も合理外交もともに流し去ったのである。日本外交が、ヒットラーに翻弄されている姿が、そこにある。なお、更に言うと、これらにつき最後、ヒットラーの対日発言に、次のようなものもあつた。一九三九年八月二五日、英ポーランド同盟条約 (Le Traité d'alliance anglo-polonaise) 締結の日、ヒットラーは、駐独英国大使ヘンダーソン (Sir Neville Henderson) と会談し、英国が、国運をポーランドに賭けたことを残念としながら、これを最後の機会として彼に

英独同盟案を提議した。その中でヒットラーは、「あらゆる情況下におけるドイツの英帝国 (the British Empire) 存立の保障」を明言し、「必要とあらば、それが要請される如何なる地域においてもドイツは、英帝国の存立のためそれに援助 (assistance) を与える」と言明した。³⁵⁾ ここには当然、直接、日本への言及はないが、デビッド・アービングによると、これは「換言すれば、ヒットラーは、日本膨張主義に対抗して(英)帝国の防衛を援助する」(In other words, he would help defend the Empire against Japanese expansionism) と誓言したことになる³⁶⁾ と言っているのである。そしてこれは、充分論拠のあるところであろう。

ここに瞥見した如く、ヒットラーの対日外交というものは、大変なものであった。日本を対等互恵のパートナーとして意識していたかどうか、この一瞥からだけでも大いに疑わしいところである。そしてその答えは、やはり否、ということになるであろう。その理由は、ここに申しのべた通りであり、要約して繰り返す必要もない。そしてその根源は、彼の日本観にあり、民族として日本を第二流以下と規定したその日本観は、一九二五年にすでにして形成されていて、「我が闘争」第一巻にはしなくも露呈されていたということになるのである。そしてこのヒットラーの対日観は、以後終始かわらず彼の心であり、それを土台として、その後の対日外交を操作していたことが、この一瞥の内容から充分感得できると言わねばならないのである。

犠 牲

個人のエゴイズムと、利己主義を抑圧する程度が大きければ大きいほど、包括的な共同社会の形成が可能となる。最低の民族は、自己のエゴイズムを抑圧すること最もうまく、その形成する社会は、せいぜい家族である。自己犠牲の精神の最高のものは、アーリア民族である。彼等は、共同社会のためにそのすべてを生命をさえ捧げて奉仕する。

その精神構造において、彼等は、最高の資質を有している。人は、その利己心と主張を共同社会に還元することによって、自らの利己と主張をそれから与えられ得るのである。ドイツ語によき言葉がある。Pflichterfüllung (義務を果たす)、これは、社会への奉仕という意味である。かかる理想主義をはなれて「人間」の存在はあり得ない。これこそが、創造の源泉である。これ、自然の意志に従順なる所以である。種の保存のための自己犠牲が、文化の源となる。エゴイズムが人類の支配者となる時、人類は、地獄に向って逆落としとなるだろう。⁽³⁷⁾

ジュウリイ

アーリア民族に対抗するものは、ジュウリイである。この民族ほど二千年の間、変らぬものはなく、またこの民族ほど人類の大変災をたくましくぐりぬけてきたものはない。しかし、この民族の自己保存本能が、かく強烈であるとしても、またこの民族の知的才能が、他より劣つたものでないとしてもこの民族の欠点は、理想主義の欠如である。その自己保存本能は、獸的なものに過ぎないのである。自己犠牲の精神を欠いているから、変事の際する一時的団結がゆるむと、相互に廃除し合うこととなる。通常、国家形成には、理想主義的自制がある。しかし、この理想主義の欠如しているジュウリイは、これに関し、地理的空間の拡大に無制約的である。

ジュウリイは、こうして無文化であり、外見的な知的品質はその実、空漠たるものである。文化の二人の女王、建築と音楽につき世界は、ジュウリイに負うものは皆無である。ジュウリイの文化は、みせかけで、すべて外国からの借りものである。ジュウリイの新聞は、彼等の文化をたたえにたたえるが、真実そこにあるのは、哀れむべき道化に過ぎない。ジュウリイは、国家をもたず、その意味で、一種の遊牧民である、と考えられるが、それは誤りである。

遊牧民は、労働の観念をもち、理想主義的観点をもっている。そして、知的前提にたつて後に発展する。アーリア民

説論

族も最初、遊牧の民であり、後に、この前提のうえで発展した。ジュウリイは、この観点を欠き、この点でもアーリア人と区別される。彼等は、寄生虫であり、常に主体をむしばみ、そこから疎外され、次に移ってゆく。居心地がいとなくなかなか出ない。その場合は、「宗教的共同社会」というベールをまとうているが、時来れば、それを脱ぎ捨てて、本性をあらわす。かく彼等は、常に他国に居住し、その必要から絶えず嘘をつく。シュローペンハウワー (Schlophenauer) が、彼等を「嘘の巨匠」(grosse Meister im Lügen) と呼んでいる所以である。⁽³⁸⁾ジュウリイは、特殊な宗教社会を形成する英国人であり、フランス人であり、イタリア人であるというが、それが第一嘘である。彼等は、宗教など持たない。タルムッド (Talmud) は、来世のことは説かない。現世の利潤ばかり説く。かくして、キリスト教は、彼等を祭壇から追放する。

「シオンの賢者の文」(Protokollen der Weisen von Zion) は、偽作だとされるが、フランクフルタ・ツァイトングの言う如く、その内容に書かれているジュウリイの嘘言は、まさに真実、彼等の姿を描写していると言わねばならぬ。⁽³⁹⁾

ジュウリイの他国に浸透するやり方は、皆一つである。ジュウリイがドイツに入ってきたのは、ローマ人の辿った道を通つてである。最初、彼等は、商人として入りこみ、その国の油断をみすまして、高利貸しとなる。これも最初は、利益を与えてその国を喜ばす。その後、財政と交易の仕事を独占してしまふ。民衆との闘争になるが、彼等は、領主にとりこみ、追放されてもまたすぐ帰来する。これを繰り返す。そして領主の基盤を掘りくずす。何時の頃か彼等は、ドイツ語を話し、ドイツ人となる。しかし、ロマン語を話すオスチアの商人も、ジュウリイ・アクセントのドイツ語を話す彼等も性格は、何ら変らない。彼等が、ドイツ人になろうとするのは、この時、手中にした財政的

支配権を世界征服にたかめるための必要から市民権を得るため、である。そして権力者に対するとともに、今まで自分が擽取してきた大衆にとり入ろうとする。彼等は、自己の被害を拡大し、人の同情を引く。この話が拡散する。そして逆に、彼は慈善を唱導する。それは、自分の将来の利益のためにのみである。そして人類の進歩について語り、自分等を取りまく桎梏から開放されようとする。一方、彼等は、株式取引を支配し、企業の真の利益や個人所有を破壊する。そして、フリーメーソン流 (Freimaurerei) を従え、また新聞をあやつって、自己の立場と主張を輿論の形で宣伝する。⁽⁴⁰⁾ これらはすべて、他の民族を亡ぼそうとするためである。彼等はジュウリイの女性を他民族、特に貴族に与えて、その血統を乱すが、彼等は、他民族の女性と決して婚姻せず、民族の血の純潔を守る。

ここでヒットラーは、資本家と労働者の対立、資本主義の腐敗、墮落をすべてジュウリイの思想と活動のせいだと強弁する。

国民のジュウリイ主義化が進行し、ジュウリイは、資本家を利用しこれを封建主義とたたかわせる。ついで、労働者を煽動し、これもジュウリイの将来のためにたたかわせる。民族資本を結局はけなしめ、国際的金融資本を盛行させる。こうして、彼等は、マルキシズム理論をつくり出し、個性、種族、民族を消去する。これは、彼等の弱点を取り除くことになるのである。労働組合運動にもジュウリイは入りこみ、労働日短縮、婦人労働保護、小児労働廃止、労働条件改善等にとり組み、最後、そのリーダーとなる。しかし、これも結局は、民族経済の基盤を掘りくずすことを目指す以外のものではないのである。

彼等は、パレスチナ国家の創建をシオニズムの下に実現しようとするが、その目的は、彼等がそこに住もうという

説
 のではなく、そこを国際的詐欺団の中心組織とし、また教育組織としようとするにある。ジュウリイは、国家経済の基盤を掘りくずし、国家に対しては、自己保存、防衛、歴史、美術、文学、演劇、美や莊嚴の観念、高貴、善を否定し、これを墮落の淵に沈ませ、なお、道徳、宗教、知性等を剝奪して、国民を奴隸化する。この最も恐ろしき例は、三千万の国民が、飢えと殺戮にさいなまれたロシアである。こうしてジュウリイの征服は、あらゆる面で完成する。しかし、この時は、また犠牲者の血の一滴までも吸いつくした吸血鬼が、その対策を失って自ら亡び去る瞬間でもある。ヒットラーのジュウリイ攻撃が、世界的糾弾の対象となっていることは、ここに喋々するまでもない。

(13) Mein Kampf, von Adolf Hitler, Zwei Bände in einem Band, Ungekürzte Ausgabe, Erster Band : Eine Abrechnung, Zweiter Band : Die nationalsozialistische Bewegung, 149.—150. Auflage, 1935, Zentralverlag der N. S. D. A. P. Frz. Eher Nachf., München. Mein Kampf, von Adolf Hitler, Erster Band, Eine Abrechnung, 1934, Verlag Franz Eher Nachfolger, G.m.b.H. München 2, NO., S. 170 f.

- (14) Ebenda, S.180.
- (15) Ebenda, S.196 f.
- (16) Ebenda, S.216.
- (17) Ebenda, S.223 f.
- (18) Ebenda, S.228.
- (19) Ebenda, S.233.
- (20) Ebenda, S.247.
- (21) Ebenda, S.256 f.
- (22) Ebenda, S.260.

- (23) Ebenda, S.262 f.
- (24) Ebenda, S.275 f.
- (25) Ebenda, S.285 f.
- (26) Ebenda, S.297 f.
- (27) Ebenda, S.303 ff.
- (28) Ebenda, S.306.
- (29) Ebenda, S.310.
- (30) Ebenda, S.318 f.

(31) ヒットラー膨張主義にとつて、ロシアと英国は、絶えざる夢魔であつた。ロシアへの進撃は、既定の政策であり、その概念は、明確であつた。ここでもヒットラーは、歴史哲学と神秘論、運命論を持ち出す。ドイツ人は、古代チュートン人(ゲルマン民族、アリア民族への想念)の辿つた道をとつて東進する、と。人口増加への施策は、産児制限はとらず、農業改革も行わない。それは、増加した人口に、領土を与えることだけである。古代チュートン人と東進と領土と、この三位一体のさし示す東方の沃野は、ロシアである。

ヒットラー・ドイツのロシア進撃策は、明瞭であり、且つ明確である。問題は、英国である。ヒットラーは、彼の商業主義とでも称すべきものを英国に振かざす。すなわち、ドイツは第一次世界大戦によつて、その全植民地と全艦隊を英国に対し放棄した。(もつとも、艦隊はそうであるが、植民地は、英国へ対してのみの放棄ではない。)そしてなお、大戦後対英産業競争を抑制した。(これは部分的な結果論としてのことであり、例えば、石炭産出。大部分は、ヒットラーの独断主張である。)故に、おそらく、ヒットラーは、これに対する英国の対独フェイバを求めたいと言うのであろう。そして、ヒットラーは、英国の努力、勇氣、俠氣、主義への忠実、騎士道といったものを礼讃する。そして、対露行動のための独英同盟論を示唆する。こう書きならべると、英国に対するヒットラーの思い入れは、明瞭である。独英同盟論も、確然たる展望をもつ如くである。しかし真実は、ロシアとのドイツの商業取引が盛行すれば、対ロシア敵対はないといひ、また一九〇四年の日露戦争が、独露戦争であつたならば、一九一四年の大戦は、起らなかったとべて、ドイツ独力の対露行動の選択を主張する。ここの言説によると独英同盟論は、しかく確固たる基礎を持たない。

しかし、ヒットラーがロシア打倒を呼号する限り、独英同盟して事に当るといふ思念は、これ以上ないほどの魅力がある。ヒットラーの英国論は、この思いにかられたものであることは、間違いない。そして「我が闘争」第一巻において、この英国論に乗ったのが、ヘス (Rudolf Hess) であった。少なくとも、このヒットラーの「我が闘争」に現れた露英両国論を信奉すれば、シヤにむに、英国とロシアの両国に戦争を仕掛けるのは、まさにドイツの運命にとつて當を得たものでないことは、火をみるよりもあきらかである。そしてヘスは、周知の如く、「我が闘争」の筆者であった。ヘスが、そのほとんどのヒットラーによる口述を、ランズベルクの獄中と、後、ベルヒテスガーデン山荘近傍の Haus Wachenfeld で、克明に筆記したとされるのである。「我が闘争」の発行は、当時ナチの出版を手掛けたアマン (Max Amann) によるが、「我が闘争」の編輯その他、発行業務についてもヘスがかかわったであろうと自然に推察される。で、ヘスが、「我が闘争」の記事内容を熟知し、ひよっとするとヒットラーよりもそれをよく記憶していたと考えられる。ヘスは、一九四一年五月一日、単身、改良型メッサー・シュミット一〇一戦闘機を操縦して、南独アウクスブルクから英国、スコットランドのグラスゴー南部の農村に飛来するのである。謎の飛行である。数多くのなぜが、この第二次世界大戦中最大の謎に対して発せられている。明確な答えはない。ヘス自身は、英国と和解するためであったと、後の書簡、証言等で一貫してのべている。ヒットラーは、ヘス事件の後、これに対し、ヘスは、精神異常者であったと苦々しく、きめつけている。この間の関係は、何人も理解できない。第一、なぜ、何の飛行計画も、管制も、通信も、連絡もない無謀飛行が、一、三〇〇斤の走行に成功したのであろうか。戦争の真只中、なぜ、領空を侵犯している正体不明の怪飛行機が、英国空軍または、対空放射で撃墜されなかったのか。まず第一、これからの大きな謎である。

筆者においても、もとよりこの世界歴史上の一つの謎の解明に挑戦しようというような大それた思いはない。ただ筆者においては、朴訥、剛毅、不屈、誠実な性格で、ゲーリング、ゲッペルス、ヒムラー、リッペントロップといった華やかな才能と活動をひけらかすナチ党の後輩達の間で、ヘスは、死ぬほど忠実に、自分の書いた「我が闘争」の一語一語を記憶していたのではないかということが言いたいのである。ランズベルクの獄で、一夜一夜を口述と筆記で過ごした頃のヒットラーの記憶が、常にあざやかに彼の胸をしめつけていたのではないか、ということである。

欧州大戦において、二正面作戦を避けなければならないということは、ドイツ歩兵操典の第一課である。シュリーフェン (General Alfred von Schlieffen) が策定し、大モルтке (General Helmuth C. B. von Moltke) が遂行した所謂シュリーフ

エン・プランは、ドイツ陸軍の金科玉條たるべきものであった。その意味では、仏軍を撃破したヒットラーが、東に軍を向けることは、何らの齟齬はないはずであった。しかし今は、違う。フランスの背後には、更に更に恐ろしい英国がいる。しかも英国は第二次世界大戦において、その国防線を第一次世界大戦のドーバーからライン河にまで伸ばしてき、そしてそのうえ、ポーランドにさえ保障を与えているのである。

この点においてヘスは、「我が闘争」におけるヒットラーの露英両国論すなわち、独英共同してロシアに当るといふそれが、正しいのだと、声を大にして叫びたかったのであると充分に考えられる。若き日の彼の僚友たりしヒットラーと、そのアイデアが、正しかったのだと言いたいということである。

こうして、結果論からいえば、六月二二日にはじまる独軍による対ソ侵寇の一カ月半前(五月一〇日)に彼は、英国に、彼の言によれば、和平を求めするために飛びたつたのである。しかしやはりそこには彼の単独飛行につき、何らの緻密な計画や連絡はなかつたのであろう。あるものは彼の局面打開のための何とも言えない大きな焦躁感と、何かせずにはおれない衝動だけであつたと推測される。

そして確かに、その年の一二月には、ヒットラーの対ソ侵寇は、早くも一頓座を来し、その時はじまつた赤軍の反攻にあつて、モスコウ前面で、独軍は壊滅的打撃を与えられ、翌年一月には、スターリンググラードの攻略戦に失敗して、独全軍は、赤軍のほぼ完全な制圧下に置かれてしまうのである。だがしかし、ヘスが飛びたつた五月は、第二次世界大戦における独軍侵寇の絶頂期であつた。すなわち前年フランスを屠つた独軍は、その年はじめからバルカン半島に侵入し、三月にはブルガリア進撃、四月にはユーゴスラビア、ギリシアに侵攻して、これらをたちまちのうちに無条件降伏に追い込み(同月一七日と二三日)、この結果ドーバーからソ連国境までの全欧州は、実にヒットラー帝国の傘下に置かれたのであつた。そしてそのうえ、独軍とその同盟軍二百個師団が準備され、彼等は、ひそかに伝わってくるソ連領乱入を目前に、悍馬のいなきにも似て、はやりにはやっているという状況であつた。

何故この独軍侵寇の絶頂期に、ヘスは、ドイツを離れて英国に飛びたつたのであろうか。つきせぬ疑問である。そして、これについては、右にしばしば誌した記述もさることながら、ヘスがなくなつてしまつた今日の眼からみるとそこに一つの解答があるように思える。彼は、この時期に英国行に移ることによつて、彼の独ソ戦の結末の洞察、即ち、独英同盟無くして対ソ戦をたたかう無謀さと、その結果としての独敗戦のその正しさを、後世史家の判断にゆだねる心算があつたのではなからう

かというのが、それである。ナチス運動において、副総統の虚名を擁しながらナチス行政の部長長を統轄する以外、さしたる功のなかつた一人の政治家として、英国行によつて、対英和平が成就すれば、それもよし。その成算なくとも、彼のナチス・ドイツの究極の運命に対する見とおしの確かさを、彼は、この時に独り戦から身を救うために、英国に飛ぶことになり、身を賭して、後世に証明しておきたかつたのではなからうか、というのである。そして事実、確かに今日、ヒトラーの名は、若き日の僚友ヒットラーと比肩するほどはなからうとしても、有名な点では、ゲーリングやバウハウスよりもはるかに著わつてゐると言わねばならぬ。これを用ひ、あれを考えれば、右の推測は、当はずとも違からずと思えるのである。それによつて英國へ飛んだヒトラーの真意があつたのではなからうか。如何。これによつて大方の御叱正を乞ひあげたい。

- (82) Hitler, Allan Bullock, a Study in Tyranny, revised edition, first published, 1953, this Bantam edition, published, July 1961, Bantam Books, New York, p.472. The Rise and Fall of the Third Reich, a History of Nazi Germany, W. L. Shirer, Simon & Schuster, New York, 1960, pp. 539-40. Hitler, Joachim C. Fest, first published, 1973, this edition, 1977, Penguin Books, pp. 881-82. ア・ン・ロマンゼ『独裁者』の German Minute of the discussions, Nazi-Soviet Relations, pp. 72-76. 米谷正一『ヒトラーの「独裁」の資料の不明確と指摘』を以てして。Text of the Soviet draft, D.G.F.P. VII, pp. 150-51.
- (83) La Faillite de La Paix, de L'Affaire éthiopienne à La Guerre, 1936—1939, Maurice Baumont, Membre de l'Institut Professeur honoraire à la Sorbonne, cinquième édition, Presses Universitaires de France, Paris, 1968, p. 867.
- (84) Le Complot contre La Paix, 1935-1939. L'Histoire contemporaine, revue et corrigée, sur le pacte germano-russe, La Table Ronde, 1966, pp. 340-41.
- (85) Documents on International Affairs, 1939-1946, vol. I, March-Sept. 1939, R.I.I.A. ed. under the auspices of Arnold J. Toynbee, 1951, p.468. Also see, Failure of a Mission, Berlin, 1937-39, Sir Neville Henderson, G.P. Putnam's sons, New York, 1940, pp. 267-73.
- (86) The War Path, Hitler's Germany, 1933-1939, David Irving, first published, 1978, paper-back edition, 1983, Papermac, Macmillan, p. 247.
- (87) Mein Kampf, Hitler, a.a.O., S. 325 ff.

(38) Ebenda, S.334 f.

(39) Ebenda, S.337.

(40) Ebenda, S.351.

② ドイツの敗亡と再生

一九一八年の敗北

一九一八年八月の戦場における独軍の敗北は、兎戯に等しい。敗北は、ドイツ国民のあげた勝利にふさわしくない。敗北は、ジュウリィの脅威から来た。それは幾世代にもわたり、ドイツ存在の根源である政治的、道徳的本能と力が、彼等の組織的な陰謀によって、それから剥奪されてきた結果である。しかしあらゆる敗北は、勝利の父であることを忘れてはならない。その根本は、民族の純血さえ失わなければ、民族の再生と勝利は可能であるということである。政治、経済、文化の悪の原因は、我々の民族的必要を考えず、また外国の民族的脅威を無視することである。しかしドイツは、年毎に内部崩壊を強めていつている。ジュウリィは、活動をやめない。我々の自己保存本能が低下するだけ、彼のダビデの星 (Davidstern) は輝きを増している。ドイツ人はこの傾向に無頓着である。我々は、ここに一つの運動を起した。そしてこれこそ、これのみが、ドイツ国民の活力低下を喰いとめ、外国経済と利益を排除して、民族的団結を強めるものである。

ドイツ民族のドイツ国家 Einengermanischen Staat deutscher Nation
この原理がこの運動の根本である。

論

ヒットラーは、「我が闘争」第一巻を終るに当り、これまでに展開された彼の主張を国家的規模で実現する道として、民族社会主義運動を提唱する。あらゆる不平、不満、絶望、怒り、嫌悪、そして選挙への反感を解消するために、一人の指導者の下に、この運動を結実さす以外道がないことを主張する。そのために必要なのは、そうする意思の力であり、決して言われる如く武器の多寡ではない。他国との同盟の場合もしかりである。英国は、最も価値高き同盟者となり得るとしても、それは英国のもつ武器の力ではなく、一旦開始された争闘には、勝利を得るまでこれを戦い抜くというその不屈の闘魂によってである。ドイツは、その復興が目標である。そのためには、意識分子だけではなく、反民族主義的分子も獲得してゆかねばならぬ。これが大衆の獲得である。しかしその中から一九一八年一月後の裁きの庭に引き出される国家的叛逆者は、これを排除し、五〇〇万のマルキシスト、平和主義者、デモクラート、中央党等の弱さと卑怯さも断固糾弾しなければならぬ。

ドイツに必要なものは、国内の全国的意思統一と国外に対する独立である。⁽⁴²⁾前者のためには、一九一四年、フランダーズ (Flandrischen Ebene) の野に、戦って散った学生義勇軍も労働者大衆も同様に欠くことはできない。後者なければ、国内改革は、植民地のそれとなり、経済的向上は国際委員会のコントロールにまかされるだけである。①大衆獲得のためには、如何なる社会的犠牲も大きすぎることはない。労働者やユニオンを従わせるための最大の経済的譲歩も、戦争に勝つ犠牲と比べれば、物の数ではない。②大衆の社会的教育問題も重要である。③大衆の民族的統一のためには、まとをしぼってその一点に強力に集中して、これを牽引しなければならぬ。弱さはいけない。大衆を動かすものは、強力、愛、憎悪、尊敬、狂信、ヒステリーである。大衆を獲得する者は、彼等の心を開く鍵が何かを

知らねばならぬ。④大衆は自然の一部であり、敵を倒し、強さを示さなければ、彼等を獲得できない。⑤民族国家の種族的保持は、最重要課題である。グレイハウンド犬のスピード (die Schnelligkeit des Windhundes) とプードルの利発 (die Gelehrigkeit des Pudels) ⁽³²⁾ 又は、血の純粋の故であり、教えられたものではない。ジュウリイ問題の適確な理解なくして、ドイツの興起はない。⑥大衆を民族国家集団に統一することは、階級的利害を抹殺することではない。敵は、国際主義である。階級利害と民族国家利害は、一致しなければならぬ。階級利害は、経済活動から生じたものに過ぎぬ。全国一致は、下級クラスの向上努力から生れる。民族社会主義運動の基盤は、ここにある。ブルジョアジーは、搾取と非人間的ビジネスをやめ、労働者は、国際主義、社会的苦惱、文化的貧困から開放されねばならぬ。⑦宣伝は、運動にとり重要である。それはむつかしく、掃除夫や錠前屋と大学教授や学生とを同時に引けることはできない。従って宣伝は、効果的であろうとすれば、ただ一つの部面に向かって行われねばならない。社会民主主義、従ってマルキシストの強力な吸引力は、それが公衆の同質性たる一つの部門にのみ向けられているからである。⑧政治改革運動の目標は、まず政治権力を握ることである。しかしそれは、一九一八年秋のそれであつてはならぬ。政治権力は民族国家に裨益し、これに何かを付け加えるものでなければならぬ。政治改革運動は、大衆のものであることを感じるべきである。⑨若々しい運動は、反議会主義である。ドイツ民主主義は、一人の首長を選挙し、これに権力のすべてを与える。多数の意思に従うことは、首長を単なる従属物と化せしめるだけである。これを市町村、県 (den Bezirk, den Kreis oder den Gau)、すべての行政段階に実施する。新選挙は、勿論行われる。しかしして運動の原理に反した首長は、罷免される。だが、選挙のあとの手続きについては、従前同様である。⑩この運動は、ドイツ民衆の政治組織化のそれであつて、その宗教改革ではない。二つの宗派は国家の柱であるけれど、宗

説論

教党の利益のために民族の倫理的、宗教的、道徳的支柱を犠牲にしてはならない。運動の目標は、君主主義、若しくは共和国の強化にあるのではなく、ゲルマン民族国家の創造にある。①運動の内部組織の問題は、効率の問題であり、指導者とその支持者の間に、スムーズな伝達の最小の媒介体を設けることである。明確な理解は、一人の人物の頭脳に起り、それが伝達される。組織は、必要悪であつて、構成員が広がれば、これが必然となる。この場合、その中核となるのは細胞であり、その組織が県、地方等へ拡大しなければならぬ。②ミュンヘンを組織の中心とし、将来の權威の確立の基礎をここで作つくる。そしてマルキシズム無謬論を、まず撃破しなければならぬ。③ミュンヘンが固まれば、これを県、地方等へ拡大する。このための手段として、財政基礎を確立する。それまではリーダーは、名譽職である。大將なき軍隊は、烏合の衆であり、政党も同様である。無能な指導者は、ない方がよい。指導者の資質は才能、決断力、忍耐力である。④運動の基本は、他を許容しないことであり、純粹の一角を確立し一切の連合は排除することである。党内を整備確立し、闘争がすべての前提とならねばならない。キリスト教の偉大は、その原理をつらぬき、狂熱をもって他を説伏したことである。⑤闘いは、誤魔化ではなく真実の努力の目標である。ジュウリイは常に嘘言を弄し、我が闘士を中傷し、罵倒する。彼が真実らしきことを言うのは、より大きな嘘言をカバーするためであり、結局それも嘘となる。我が闘士が闘士であれば、彼等はこれを痛罵し、呪い、非難する。非難されること、我等が闘士であることの証拠でさえあるほどである。この死ぬ以外やまぬ、あくなき闘争を、我が民族とアーリア人に挑む敵に、最も効果的に戦う人間のみが、このことを理解できる。⑥あらゆるものは、個人の価値によつてきまる。芸術家は他人によつてかわられ得ないが、詩人、思想家、偉大なる政治家、兵士みな同じことである。ジュウリイも偉大である。しかしそれは、人類とその文化を破壊することにおいてのみそうなのである。人がジュウリイに

叩頭する時、人は自らその力を放棄する。⁽⁴⁾

ここにおいて、ヒットラーは、民族社会主義運動を提唱するのであるが、ここに吐露されているのは、これまでの彼の言説の要約、綱領の如くみられる。そこには、しかし大衆の獲得、宣伝の重要性、国際主義、議会主義、宗教、マルキシズム、ジュウリイ攻撃、民族、純粋性、闘争礼讃といったものの冗長な繰り返しがみられるのみである。

兵管と政治結社

ヒットラーは右の如くに論じきたるが、「我が闘争」第一巻の最後に、彼が「ドイツ労働党」に兵士のまま入党し、そこで天与と言うべき演説の才能を遺憾なく發揮して、大成功を収めてゆく有様を煽情的に描いている。しかしそこに出てくるものは、すべて軍隊を中心としたその讃歌となっている。彼はそこで軍を退職してこの政党に専属となるが、最初の党员七名と政党会合の参加者を一三名、三四名、そして百数十名、四百名というふうに拡大してゆく過程をのべている。その時、彼は、軍人の復員者を党勢拡張の中核として求めたと言っている。復員者が、彼のような活動には最適だとしている。グレイハウンド犬のように敏捷で、レザーの如くタフ、そしてクルップ鋼のように堅固なものは、軍隊精神を吹きこまれ鍛えられた者以外には求められないというのである。

そしてまた、犬の如く常に蹴散らされる当時の政治運動や会合には、心の力だけでは無益であり、これに歯向う武装と恐さを示すことが必要だ、とのべている。彼等の運動は「党」と呼ばれるべきで、目的をもってそれが達成せられていないとき、これを目指して運動する団体は党であり、他の名を模索するより運動の実体が重要であるとして、目的として、他の既成諸政党を破壊するための活動を党は実行する。「ドイツ民族的放浪学者共」(deutschvoikischen Wander-scholaren)には、いくら警戒してもし過ぎることはない。彼等は、三〇年も四〇年も、同じ理

説念を繰り返し、有史以前とか、石斧、槍と楯等という概念をひねくり廻すだけで、共産主義者との戦いなど、もし起れば、一目散に逃げ散ってしまう。ジュウリィが、新ドイツ国の真の戦士よりも彼等を大事にするのもむべなるかなである。宗教家は、もっともらしいことを言うが、彼等は我々の真の敵ジュウリィに対する闘争を分断する者達であり、我が民族の再建を阻む者によって、我国に送りこまれたとさえ考えられる者達である。民族的 (völkisch) という言葉は、バイア教授 (Professor Bayer)⁽⁴⁵⁾ が言うように、君主制概念ではあり得ない。民族を忘れた民族概念はあり得ない。従って我々は、この若き運動を、目的を等しくする軍分遣隊的性質の集合体として党と名付け、また「民族社会主義ドイツ労働者党」(Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei) と命名したのである。我々は、

卑怯者の言論人からひどく攻撃される。それは、ペンの力である。腕力には腕力をもってという主張は、彼等をひるます。しかしデモステネス (Demosthenes) やえ五〇人の暴力でだまらせられるという言葉に、實際上彼等は馬耳東風である。それは何故かといえば、彼等はそんな危険には滅多に近づかないからである。

無効率、だまし、暗い沈黙、盗み、横柄、厚顔あらゆる手段を駆使して我が民族の敵は、我々を攻撃して来る。これに対しては、いくら注意してもし過ぎることはないのだ。

③ 闘争へのステップ

ヒットラーは第一巻末尾に、彼が他の黨員と議論の挙句、決行して大成功を収めた、一九二〇年二月二四日の民族社会主義ドイツ労働党の大集会⁽⁴⁶⁾のことを、その後の党発展への教訓とともに熱っぽくのべている。これは、絶えざる外部からの圧迫、共産党との日々の対決、衝突の中からこういって党の集会を成功させ、大衆へのアッピールを効果

的としてゆく彼の苦心談が、第一巻の棹尾を飾っているという体裁である。しかし、この時ヒットラーが闘ったのは、直接共産党とのみでなく、右翼同士の主導権争い、マルキシストと結託した右翼人民党等との激闘等をも含んでいた。一九一九年からミュンヘン一揆に至る、ババリアにおける民族社会主義運動の存在と戦いを記憶せよ、と彼は叫ぶ。この間該集会では、ドイツ労働党の創設者といわれたカール・ハラール (Karl Harer) とアントン・ドレクスラー (Herr Anton Drexler) のうち、ドレクスラーが、党首の地位についている。スワステカ党旗の基調を赤にきめたのも、この時であった。ヒットラーは党の宣伝を受持ったが、その綱領は、①大衆へのアッピール、②二、三個の題目、③その繰り返し、④テキストの自得的、權威的言い廻し、⑤宣伝拡散の執拗さ、⑥効果をあせるな、であった。こうした闘いの中で、勿論最も圧迫的であったのは官憲で、結局ミュンヘン一揆の後、彼は権力によって獄に囚われるのであるが、こうした情勢下、私的軍事組織に同情的であった二人の人物、プエネル (Ernst Pöhner, ババリア警察庁長官、Der damalige Polizeipräsident) とフリック (sein treuer Berater, Oberamtmann Wilhelm Frick、プエネルの顧問で、地区長官⁽⁴⁷⁾) の名をヒットラーは忘れず記録して、彼等は公務員である前にドイツ民族主義者であった、としてたたえている。二・二四集会をもって彼は第一巻の結論としているが、これは彼のよみが当り、約二千名の聴衆を集めることができたそれであった。その半数は、独立社会民主党と共産主義者であった (Weit über die Hälfte des Saales schien von Kommunisten und Anhängigen besetzt)。しかし彼等にこそ、ヒットラーは、話さねばならなかったのだ。演説の妨害と怒号、弥次は彼の言葉と彼の同志の努力で次第に称讃の声に変わり、ヒットラーが、有名な党二五カ条⁽⁴⁸⁾の綱領を最後聴衆に提示したときは、集会の興奮は最高調に達していた。「それは、全員一致で承認された」、とヒットラーは書いている。「ここに、新しい信念と誓言、そして強い意思が生

説論

れた、「来るべきドイツ再建とともに、一九一九年一月九日のあの忌わしい裏切りに対する仮借なき復讐の女神が歩み出た⁽⁴⁹⁾」、と。かくしてここに、ヒットラーの人間性無視と、戦争礼讃も最高潮に達する。集会は果て、ヒットラーは、群小の右翼戦闘党の中で、彼の民族社会主義ドイツ労働党のみが、劃然たる歩みを統けるのだと絶叫してこの巻をとじることとなっている。

ヒットラーの「我が闘争」第一巻を、筆者なりに熟読玩味して要約すれば、右述してきた如くなる。ここでその中から、ヒットラーの根源的精神構造をさぐり出してまとめる作業が必然的に出てこなければならなくなる。しかし、それについては、本文中に、ヒットラー言説の末尾に、筆者なりのコメントを書きこんできたということもあり、ま

たやはり、「我が闘争」の要約は、この第二巻を熟読、分析した後で全体的に行うのが、本来、当然のことと思えるので、ここでは、これを避け、第二巻の分析を加えたいので、ヒットラーの「我が闘争」に関する根源的精神構造の要約を行うこととする。

そしてこれに引続き、ヒットラーの書きあらわした、またその思想を直接具体的に伝える資料を、この小論の冒頭にのべたものを中心に、熟読玩味して、更に「我が闘争」を越えるヒットラー精神思想の全体にせまり、これを把握する分析を行うこととする。日暮れて道遠く、加えて多岐亡羊の感にさいなまれつつ、これらに他日を期し、大方の御叱正を乞いあげて、一旦の筆をここに置く。(従って、最初に予定した、「三むすび」は、少しくさきに延期される。)

- (42) Ebenda, S.368.
- (43) Ebenda, S.372.
- (44) Ebenda, S.369-S.388.
- (45) Ebenda, S.398. Professor Bayer の名は、個人名を記録する価値がないということで、版を改めた時から、これは削除され⁷⁵⁴⁹。
- (46) Mein Kampf, Hitler, a.a.O., S.401.
- (47) Ebenda, S.403.
- (48) The Nazi Years, A Documentary History, edit. by Joachim Remak, Prentice Hall, Inc., N.J., 1969, pp. 27-30.

民族社会主義者ドイツ労働党綱領

ドイツ労働党の綱領は、時限的なものである。党のリーダー達は、党の目的が一旦達成されたなら、大衆の間に人為的な不満を創造することによって、党の継続的存在を確保するためにのみ新しい目的を確立するというような意図を何ら有しない。

- 1、我々は、民族自決権の原則によって、全ドイツ人を大ドイツ国に結集することを要求する。
- 2、ドイツ民族の他の民族との平等権を要求する。そして、ベルサイユ条約、サン・セルマン条約 (The Peace Treaty of Saint Germain) の廃棄を求める。
- 3、我が国民を養うための、またその過剰人口を移住さすための領土 (植民地) を要求する。
- 4、人種的同胞のみが、市民たり得る。宗教宗派にかかわらず、ゲルマンの血を同じくする人のみが、人種的同胞である。従ってジュウリイは、人種的同胞ではない。
- 5、非市民は、ゲストとして以外、ドイツ国に居住できない。彼等は、外国人法の適用を受ける。 (6、省略)
- 7、国家は、その市民達に、生活の資を与えることをその義務の第一とすべきことを要求する。もし国家が、このことをできない場合、外国の国民達 (すなわち非ドイツ市民) は、ドイツ国から排除されなければならない。
- 8、これ以上の非ドイツ人の移入は、禁止されるべきである。一九一四年八月二日 (ドイツの対連合国宣戦の最中—筆者註) 以後、ドイツ国に入った全非ドイツ人は、遅滞なくドイツ国から強制退去させらるべきである。 (9、省略)

- 10、精神的、肉体的勤労が、全市民の第一の義務でなければならぬ。(後半省略)
- 11、勤労と骨折りがなく稼がれた全収入の廃棄。

利子奴隷の絶滅

- 12、戦争によって一国家の上に課せられた生命、財産の犠牲の甚大さにかんがみ、戦争利得は、国家叛逆罪と規定されるべし。全戦争利得の収奪を要求する。
- 13、各会社に組織されている全企業体の国有化を要求する。
- 14、大企業との利潤シェアを要求する。
- 15、老人保険の拡大。
- 16、健全な中産階級の創出と、その支援。百貨店の社会化、その低室料による小売商人への貸与。国家、州、市の購買に關して小売商人への特別の優先配慮を要求する。
- 17、国家的必要にかなう土地改革、補償なき土地収納法の立法。全地代の廃止、土地投機の廃止を要求する。
- 18、(前半省略) 一般的犯罪者、高利貸し、不当利得者等は、性別、信仰にかかわらず、死刑とすることを要求する。
- 19、唯物的世界秩序に奉仕するローマ法を廃止し、ゲルマン法をもってこれに代えることを要求する。
- 20、有能、勤勉なるドイツ人に対し、高等教育を開放し、指導者への道を確保する。(中略)貧困家庭の有能なる小児に、その両親の階級、職業の如何にかかわらず、国費による教育を受けさせることを要求する。
- 21、国家は、全国民の健康水準の向上に努めなければならない。すなわち母子の保護、小児労働の禁止、強制的体育、スポーツの実行を規定する立法を行い、青年の体育向上に資する全組織に可能な限りの援助を与えること等によって、この目的を達成しなければならない。
- 22、金銭づくの職業軍を廃止し、人民軍を創設しなければならない。
- 23、 国際的、政治的虚言への戦いを宣言する。真のドイツ新聞創設への提言。(a)ドイツ語で発行される新聞の編輯者、寄稿家は人種の同胞であるべきこと。(b)非ドイツ新聞の発行は、政府の許可を必要とし、必ずドイツ語で発行されること。(c)非ドイツ人は、ドイツ新聞に一切の財政的シェアを有し、またそれに如何なる形ででも影響することを法律によって

禁止されること。これを犯した新聞は、廢刊とし、關係非ドイツ人は、直ちに国外追放されること等を要求する。

全体的幸福を侵犯する新聞は、禁止されるべきである。我々の国家生活を毀損する如き文学、美術の傾向に対し、法律的反対闘争を展開すること。この要請を破る文化的催しを抑圧すること等を要求する。

24、 国家の存立をおびやかさず、ゲルマン人種の道徳的、倫理的感情を侵害しない限り、宗教の自由を認めることを要求する。我が党は、かくの如くしてキリスト教を信ずる。ただしその如何なる特定の宗派とも結合しない。それは、我々の内部とその周辺にあるジュウリイ的、唯物的精神と戦う。そして我が国民の永遠の再生は、その内部からとその基礎の上においてのみ達成されることを確信している。

自己的利益に優先する共同の利益

25、 これらすべての条件を満たすため、ドイツ国における強力な中央権力の創造を要求する。中央政治議会は、全国家とその組織一般に、無条件の権力をふるうものでなければならぬ。階層と職域を基礎とした自治体が、国家によって通過させられた立法をドイツ各州に適用するため、形成されなければならぬ。

党の指導者は、この綱領を実施に移すため、その権限内にあるすべてのことをなすことを誓言する。必要とあらば、そのために生命の危険をおかすことも恐れない。

一九二〇年二月二四日

ヒトラー

Gottfried Feder, Das Programm der N.S.D.A.P. und seine weltanschaulichen Grundgedanken (Munich, 1932), pp. 19-22.

この二・二四綱領は、ヒットラーとナチス、またその運動にとって勿論、非常に重要なものであり、そのための研究も種々あつて、そのためこの内容の解釈もかえつて複雑となつてゐる如くである。シャイラー、アラン・バロック等と比し、フェスト、マーザー、ジョン・トランド、Adolf Hitler, (John Toland, Doubleday & Co. Inc., New York, 1976)等の書物が、ナチス初期の活動に焦点をあて、研究がなされてゐる。しかし勿論、不明なところも多いようである。特にこの二五カ条が誰によって執筆されたものかは、非常に重大な点であるが、なかなか解明困難の如くで、アントン・ドレクスラーの筆にな

り、ナチス党初期の経済顧問格であった、G・フェーダーの思想が強く影響しているというふうに解釈されている。利子奴隷という言葉は、後者の創作にかかり、彼は *Deutscher Kampf und zur Brechung der Zinsknechtschaft* (利子奴隷撲滅ドイツ同盟) という運動も組織していたほどである。ただヒットラーは当時、党においても無名に近く(党首となるのは一九二一年七月二九日の党大会において)、これへの影響は少なかったとみられる。しかし素直にこの綱領を読めば、「我が闘争」の思想、主張とこのそれらが天地霄壤の差があることは、一目瞭然であろう。これについてのくわしい解明には、稿を改める必要があると思えるが、「我が闘争」は、戦争待望論であるが、「綱領」は、戦争忌避で、戦争利得者は極刑にしろという発想であり、何よりも土地国有や大企業収奪をいう「綱領」には、明瞭に所謂ソビエト的発想があり、「我が闘争」がソビエト・ロシアや共産主義との最後の対決を織り出すのでは、大へんな、径庭の差がある。「綱領」は大ドイツ民族国家論で、その主張は全くの外国と外国人排斥という極めて短絡的なもので、シュウリイ嫌悪もどちらかといえば、その中に含まれているが、「我が闘争」の方は、アリア民族⇨ゲルマン民族という比定でシュウリイ排斥を主として、外国人忌避が従となっているという構成である。ヒットラーは植民地についても、英国との同盟待望論の関係でこれを要求しない。なお言えば、人民軍創設の主張、国家第一の義務は、国民に生活の資を与えることという主張等も、「我が闘争」の中にはないものである。いろいろと興味ある相異がある。これらから引き出せる一つの結論は、このヒットラーの直接関係しなかつたドイツ労働党綱領の示すドイツ労働党は、やはり社会主義、ソビエト的体質の党で、ヒットラーのナチスとは甚だしく異なつたものであつたと言わざるを得ないことである。この党をヒットラーが、結局は、乗つとつて、ハラを追放し、ドレクスラーを支配して自己の自家業籠中のものとしてゆく過程が、今後、詳細に跡づけられねばならないであろう。そうすれば、ここから、一九三四年六月三〇日の「槍ぞすまの夜」(the night of long swords)のノーム(E. Roehm)、グレノール・シュトラッサー(Gregor Strasser)以下のパーティが、ナチス左派の切除であつた事実も、更に詳細具体的に、鮮明されるのではなからうか。

(45) *Mein Kampf, Hitler, a.a.O., S.405f.*

ヒットラーと戦争については、彼が、政権獲得以来、戦争準備に狂奔し出したという意見は、大方の論者において一致している。ただこれを一九三三年から具体的準備に入つたとするものと、有名なホスバッハ会議(Hosbach Conference)をもつてそうし、一九三六年末からこのための具体的プランが云々されはじめたというものとある。といつてもそう劃然と二〇〇米競走のスタート・ラインを引くような区別の論議でないことは勿論である。デビッド・E・カイザー(David E. Kaiser)と

シャイラーは、例えば前者といえる。シャイラーは、「英国もフランスもまたドイツ国民も気付かなかつたが、ヒットラーがその治政最初の四年間に行ったことは、ほとんど戦争の具体的準備であつた」(W.L. Shirer, op. cit., p. 300)と言ひ、前者は、「かく一九三三年当初より、ドイツの一般的経済政策、特に東欧との貿易政策は、追々ドイツを征服戦争にそなへる目的に奉仕するものになつた」(Economic Diplomacy and the Origins of the Second World War, Germany, Britain, France and Eastern Europe, 1930-1939, Princeton University Press, 1980, p. 62.)と書く。一九三六年説は、まず、アービングが、「この年の秋頃からドイツで、戦争資材に対する具体的な論議が、三軍を中心として喧しくなり、これを背景として一九三七年十一月五日の「ホス・バットン会議」で、ヒットラーは、ドイツは、食糧を自給自足する希望をもつことはできないし、食糧の過剰生産を享有している国々が、この点で、ドイツに協力してくれることもあり得ないから、ヒットラーは来る五、六年の間に、生活圏問題を解決するため戦争に訴へる決心であることを確認した」と言つてゐる。(David Irving, op. cit., pp. 62-63.) ムルドン・A・クレイグも「一九三六年八月の秘密覚書において、ヒットラーは、国防軍に四年以内の戦争準備を行うよう主張してゐる」とのへ、また「ゲーリングは、同年九月四日、シャハト(Schaacht)以下閣僚に、我々の現在の状態は、戦争勃発の直接的危険の中にあるようなものである」との言つてゐる。(Germany, 1866-1945, Gordon A. Craig, Oxford History of Modern Europe, Clarendon Press, 1978, pp. 613 & 618.) これに各研究家の説を次々あげれば、恐らくキリのないことになるであらう。そして重要なことは、これら一九三三年説といひ、三六年説といひ、すべてこれらの時点で、ヒットラーの戦争傾斜が突発的に起つたとは考えていけないと言ふことであらうと思へる。愚見によれば、本文にしばしば主張するように、このヒットラーの戦争期待は、彼の生涯の目的であり、それが「我が闘争」に赤裸々にあらわれてゐるということである。すなわち、ヒットラーは、なおそのことを主張し、訴へたいためにこそ、「我が闘争」を、少なくともその第一巻をあらわしたのである、となるということである。これにつきシャック・シャステネは、人間の闘争本能という点をふまえてではあるが、「我が闘争」をひいて、民族社会主義の抬頭以來戦争は不可避となつた、としてゐる。すなわち、「ドイツの近傍で、新しい軍事国家となる国はすべて、ドイツにとつて危険を構成する。このことは我々に、このような国家の誕生をあらゆる手段をもつて妨げ、また一旦このような国が生れ出たならば、これと戦う権利のみならず義務をも与へるのである」とヒットラーが喝破してゐるからである、と言つてゐる。(Vingt Ans d'Histoire diplomatique, 1919-1939, Jacques Chastenet, Éditions du Milieu du Monde, 1945, pp. 215-16.)

ヒットラーの戦争志向は、本文にのべたところとして、彼のナチスは、明確に一つの軍隊組織であったといえる。それはやはり、突撃隊、親衛隊の組織と存在がそのことにあずかって大きなものがあつたであろう。これらは一九二一年からすでに組織されており、前者はその時期に一つの完成を迎えていたという。(大阪経済法科大学法学論集第十八号、一九八九・一、「ファシズムと市民社会、大衆社会」拙稿、四、註(1)参照、三〇頁)すなわち、これらは、当時第一次世界大戦後のドイツに群生した右翼的武闘団体に属していた。ドイツ自身が武闘団にかまれているような雰囲気であつたから、その中の一つとしてナチスが生れ、それが結局は、他の群小武闘組織を打倒、吸収してその中の最強、最大のものとなつてゆくのであり、そうだからナチスが軍事組織であつたのは、これら背景と事情の当然の帰結であつたろうと考へねばならない。ヒットラーの「我が闘争」はこうした背景と事情とナチスの生誕にピッタリ一致していたといわねばならないのである。ちなみにいえば、突撃隊、親衛隊の軍隊的儀式活躍は、フランソワ・ポンセ(François Poncet, op. cit., pp. 98-109)や、クロード・ペラによつて、ヒットラーの首相就任時、ポツダム第一回国会、第一回メーデーのテムペルホーフの集会(sur le champ de manoeuvre de Tempelhof)等に「きこぎ」と描写されている(19)。(Dossiers secrets de la France contemporaine, tome 3, La Guerre à l'Horizon, 1930-1938, Claude Pailat, Robert Laffont, pp. 103-108.)